

[シンポジウム]

「言語とジェンダー」研究からのコメント

佐竹 久仁子

1. はじめに

まず、言語とジェンダーの関係を簡単に示しておこう。言語は単に「女」あるいは「男」とは何か(ジェンダー)を表象するだけではなく、ジェンダーを作り出すものでもある。わたしたちは社会に流布している性別や性差についての諸言説(テキスト)を「読む(聞く)」という実践によって「女」「男」についての知識やイメージを組み立てる。また、日常生活における相互行為のなかでそうした知識を用いた言説(ディスコース)実践を行うことで「女」と「男」に異なる意味を与え(ジェンダーを作り出し)、かつ自己のジェンダー・アイデンティティーも作り上げている。

ここから「言語とジェンダー」の研究には二つの方向性が考えられる。ひとつはジェンダー・イデオロギーを流布するテキストに焦点をあわせた言説分析であり、また、ひとつはジェンダーやジェンダー・アイデンティティーを構築する具体的な言語的相互行為の過程の分析である。小倉氏、中村氏の論考は前者に、山崎・山崎両氏の論考は後者に位置づけられる。

2. 小倉論文

小倉論文では近代フランスの女の身体を表象する言説の分析からブルジョワジーのジェンダー・イデオロギーが論じられている。ここではそのなかの医学の言説をとりあげ、ジェンダーに関する科学的言説のもつ意味を現代に結びつけて考えてみたい。

近代以降、医学をはじめとする科学は「真理」という権威をまとって特権的地位についた。男である科学者たちによって「女」は新たに「科学的」に定義されることになる。小倉論文では、19世紀初頭の『医学事典』において、女の身体は「欠落をかかえた男性」として表象され、身体の性差から性的性格の相違(「男は能動的、女は受動的」「男は理性、女は感性」)が説明されていることが紹介されている。医師たちにとっての「女」は、女の大多数を占める農民や労働者階級の女ではなく、ブルジョワ階級の女(男に保護され、私的空間に閉じ込められ、コルセットで身体を締め付けられていた)であった。したがって、医師たちが女を

か弱い劣った性としてみたのも不思議はないといえる。しかし、ブルジョワ階級の女を「女」として一般化し、性差を強調して男の優越性を主張する医師たちの言説は、女についての「科学的根拠」に基づく「真理」として社会的に大きな影響力をもつことになった。

西欧の19世紀は「第一波フェミニズム」の時代として知られている。女たちは18世紀のフランス革命期には革命運動の重要な担い手として参加し、その後も19世紀を通じてさまざまな権利要求を繰り返していった。その要求は男たちの議会によって次々に否定されることになるが、その理由は一貫して女の特異論と性役割論であり、性差に関する科学的言説はそれに根拠を与えたのである。この時期、西欧の学問を積極的に受け入れた近代日本のばあいも当然同じことが起こった。19世紀の性差に関する科学は、こうして政治的に利用されただけでなく、その後、教育やメディアをとおして広く流布されることによって人々のジェンダーに関する日常的知識をつくっていくことになる。

近代以降、人々は科学の権威を信頼し、女と男の性格や役割の差についても「科学的根拠」を求めるという心性をもつようになったといえる。19世紀の医学の言説がその後の科学によって否定された後も、それにかわって人々の要求にこたえるような性差に関する科学的言説が常に流通してきた。現代社会では「女と男は本質的にちがう」という信念が強固にわけもたれている一方で、それを否定する言説も力を持ちはじめている。信念のゆらぎに対する不安を解消するために人々が求めるのはやはり科学的根拠である。たとえば、「女脳、男脳」をテーマにした本がよく読まれていることにそれがあらわれている。通俗的な科学読み物であっても、それらは「大脳生理学」といった科学の名で語られていることで人々は信頼し安心するのである。

3. 中村論文

日本の「女性語研究」は近年までその多くが「女と男とは異なることばづかいをする」という前提を自明のものとし、女のことばづかいの特徴を「女らしさ」や既存の「性役割」と結びつけて説明するものであった。研究自体がジェンダー・イデオロギーや言語イデオロギーにとらわれたものであり、かつ、それを再生産するものであったといえる。これに対して中村氏は一連の研究（たとえば中村2001）において、「女ことば」という概念が歴史的に構築された言語イデオロギーであり、社会のイデオロギーや権力構造と関連させて論じるべきものであることを明らかにした。

本誌の中村論文は、近代日本の言語に関するジェンダー・イデオロギーが政治的状况に呼応して変化し、戦中期に「女ことば」イデオロギーが成立したことを論じたものである。戦時下の総動員体制のなかで、女を「二流国民」として国民化するという政治的動機から「女ことば」がイデオロギー化されていったという道筋が提示されている。「女ことば」を「国語」

のなかに例外として位置づける一方で文化ナショナリズムにもとづく「伝統」のお墨付きを与える戦中期の学問的言説が、ジェンダーを分離しつつ「女性の国民化」をおこなうという国策に合致していたことは確かだといえる。ただし、「女ことば」イデオロギーは、すでにそれまでにメディアの言説のなかで形成され、それを受容する（そして再生産する）階層があったと考えられるのではないだろうか。

「女ことば」という概念は、単に「女らしい話しかた」というだけではなく、言語形式の非対称的な性別化（日本語には「女ことば」という女にふさわしい特定の言語形式と「男ことば」という女にふさわしくない特定の言語形式がある）という特徴をもつ。その諸形式の多くは「標準語」の基盤とされる「東京の中流社会のことば（山の手ことば）」にもとづくものだが、それらは「東京語＝標準語」という東京語の権威化のもとに、小説や雑誌、教科書などの口語体による書きことばメディアの会話文や、のちにはラジオや映画などの音声メディアをとおして、インフォーマルな話しことばの標準モデルとして流布されていた（佐竹2004）。この性別化されたことばづかいは標準語政策によって意図的に作り出されたものではなかったが、「国民のジェンダー化」という国家の方針に合致するものであった。一方で、家内領域を女、公共領域を男のものとする近代的な性別役割分業を実現した新中間層と呼ばれる階層が第一次世界大戦後には本格的に登場する。メディアの流布する性別化された話しことばは、こうした都市の新中間層の人々のジェンダー・イデオロギーにも適合するものであり、実際の使用はともかく、教養ある上品なことばづかひの規範としてこの階層に受け入れられることになるのである。

戦中期の文法家が記述したのは、メディアによって流布されていた「女ことば」であった。「女ことば」の文法や起源について語る学問的言説の出現によって、すでにメディアによって形成されていた「女ことば」イデオロギーはより強固なものとなったといえる。

4. 山崎・山崎論文

エスノメソドロジーの会話分析の関心は、会話を社会的相互行為のひとつとしてとらえてその組織化を研究するところにあつたわけだが、その方法論と研究成果は「言語とジェンダー」研究にも大きな影響を与えている。会話分析によって明らかとなったことのひとつに、「ごく自然な」異性間の会話においてもジェンダーの権力現象がひそんでいるということがある。また、会話分析は「ジェンダーの社会的構築」が言説実践によってなされる過程も示した。会話的相互行為（言説実践）を組織化する方法のひとつとして性別カテゴリーによるカテゴリー化があるが、この性別カテゴリーの使用がジェンダーを作り出す実践となり、さらにその性別カテゴリー化に対して人々がとるさまざまな対応がさまざまなジェンダー・アイデンティティーを作り出すのである。

山崎・山崎論文ではセクシュアル・ハラスメントに関する会話がとりあげられ、性別カテゴリーの使用についての具体的な分析例が示されている。ここでは、断片1・断片2の解釈を考えてみたい。この場面でF1は「正当な知識」を持つものというより、答えの正当性を判断する権利を持つものとして扱われていると解釈できるのではないだろうか。セクシュアル・ハラスメントでは（潜在的に）女は被害者、男は加害者と認識され、何がセクシュアル・ハラスメントにあたるかを判定するのは女であるとされる。この問題では判定の権利の帰属が性別カテゴリーによって異なるのである。M8、M9が「すみません」と言ったのは、間違った答えを出したことで加害者となる可能性のある「男」として、被害者となりうる資格を持つ「女」であるF1に謝ったと解釈できる。断片3でも会話参加者は自分たちを「男」とカテゴリー化し、セクシュアル・ハラスメントについての判定の権利がないことを示しているといえる。

ところで、性別カテゴリーは「セクシュアル・ハラスメント」のようなジェンダーに直接関連する話題でなくとも使用されうる。他の成員カテゴリーと異なり、ほとんどすべての場面・文脈で使用可能であるというのが性別カテゴリーの特徴である。今後、さらに多種多様な会話場面における性別カテゴリーの使用のメカニズムについての分析を行うことで、性別カテゴリーすなわちジェンダーの問題を明らかにしていけるだろう。

5. おわりに

「言語とジェンダー」研究は従来の言語研究の枠組みにはおさまらない分野で、人間や社会に関するさまざまな学問領域からのアプローチがなされている。シンポジウムでは記号論、言語学、エスノメソドロジーというそれぞれ異なる立場からの知見が述べられ、その一端が示された。

参考文献

- アン・ファウスト＝スターリング、池上千寿子・根岸悦子訳、1990、『ジェンダーの神話』東京：工作社。
 小倉孝誠、1999、『〈女らしさ〉はどう作られたのか』京都：法蔵館。
 佐竹久仁子、2004、「『女ことば／男ことば』規範の形成—明治期若年者向け雑誌から—」『日本語学』23-7, 64-74。
 中村桃子、2001、『ことばとジェンダー』東京：勁草書房。
 山崎敬一、1994、『美貌の陥穽—セクシュアリティ—のエスノメソドロジー』東京：ハーベスト社。